東京外大 東南アジア学 Southeast Asian Studies TUFS No. 26, 43-75, 2020

ラオ語の語順と情報構造[1]

Word Order and Information Structure in Lao

鈴木　玲子
Reiko Suzuki

東京外国語大学総合国際学研究院
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

Abstract

For an isolating language such as Lao, word order is significant for understanding the meaning of a sentence. The purpose of this article is to describe the features of word order and information structure in Lao. According to Lao information structure, 1) the topic is placed at the top of the sentence, and the focus is placed at the end of the sentence as a general rule, 2) the topic marker or focus marker is necessary to attach to some constituents such as subject which cannot be placed as mentioned in 1). As for two continuous sentences production, it is the most understandable structure that the focus of the preceding sentence is inherited as the topic of the subsequent sentence.

キーワード：情報構造，主題，焦点，語順，ラオ語
Keywords: Information structure, Topic, Focus, Word order, Lao

はじめに

本稿は、情報構造に関する調査結果および現代ドラマの台本を検討することによって、ラオ語文の語順と情報構造に関する諸特徴を明らかにすることを目的とする。情報構造に関する調査は、峰岸（2019）の「情報構造調査票 Ver.1」をもとに調査を行う。一方、現代ドラマの台本は、Dokked（2013）「huacay paatthanaa」（希望という想い）を使用する。この台本は、Bounyavong, Douangdueane氏による同名小説（1989）をDokkedグループがラ

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

ジオの台本用に書きおろしたものである。本稿の例文は、全て調査時か、台本中の文より得られたものである[2]。なお、表記は鈴木(2006)に略号はThe Leipzig glossing Roles[3]と鈴木(2019)に従う。

I. ラオ語の基本語順

ラオ語は形態論的には語形変化をしない孤立語タイプの言語である。そのため、文の意味は語順や文法範疇を表す機能語によって決まると言っても過言ではない。したがって語順は文の意味を理解するための重要な観点である。

1. 文

文の基本語順は「主語＋述語＋補語」である。「主語」とは叙述する事象（＝イベント）の主体[4]である。「述語」とは叙述の中心部分で、主体の動作、状態、属性を表すので、多くの場合は動詞を使う[5]。「補語」とは述語が受け手や影響先を必要とする意味の場合、述語だけでは一つの事象として意味が完結しないので、その部分を補う不可欠要素のことである。したがって動詞と補語の間にいかなる要素も置くことはできない。いわゆる目的語も補語に含まれるが、「pát hɔ̀ŋ（掃く+部屋⇒部屋を掃く）」の「部屋」は動詞「掃く」の目的ではなく、掃く場所を表していることからもわかるように、補語は目的語だけとは限らない。

例(1)では、「買う」は必ず「買うモノ」を述べて初めて一つの事象として意味が完結するので、「車」は述語動詞「買う」の補語ということになる。

(1) láaw sûɯɯ lot
　3　buy　car
「彼は車を買った」

もちろん動詞単独で意味が完結する場合は補語を必要とせず、文は「主語＋述語」となる（例 2)。

(2) fɔ̌n tók

rain fall
「雨が降る」

2. 句

ラオ語の句構造は、「被修飾語＋修飾語」である。例えば名詞句「あの店」は「店＋あの」となる（例 3)。付属語と自立語もこの語順を踏襲し、前置詞句「あの店で」は「付属語＋自立語」、即ち「～で＋｛店＋あの｝」となる（例 4)。

(3) hâan nân
shop that-DEM
「あの店」

(4) yuu hâan nân
at-LOC shop that-DEM
「あの店で」

副詞句が「述語＋補語」を修飾する場合も「被修飾語＋修飾語」の原則の上に立ち、「〔述語＋補語〕＋副詞句」と言う具合に副詞句は後ろに置く（例 5)。

(5) láaw sûɯ lot yuu hâan nân
3 buy car at-LOC shop that-DEM
「彼はあの店で車を買った」

「様態の副詞句」「場所の副詞句」「時の副詞句」を同一文で述べる場合は、「主語＋述語＋補語＋様態の副詞句＋場所の副詞句＋時の副詞句」となる。しかしながら、ラオ語では前置詞を用いた修飾句はあまり使わない[6]。換言すれば、前置詞句がたくさんある形の文はあまり使わず、一般には動詞連続の表現を用いるか、いくつかの文に分割して表現することが多い。例(6)は、「主語＋述語＋補語＋様態の副詞句＋場所の副詞句＋時の副詞句」の語順で、理論的には文法的に正しい文である。しかし、普通は例(7)の「主語＋述語＋補語＋様態の副詞句，述語＋場所の副詞句＋時の副詞句」と 2 つの文に分割した形を使う。

(6) láaw sûɯ lot dûay khuwáam phɔ́ɔcǎy yuu hâan nân mûɯwáannîi
3 buy car with satisfaction at-LOC shop that-DEM yesterday
「彼は昨日、あの店で満足げに車を買った」

(7) láaw sûɯ lot dûay khuwáam phɔ́ɔcǎy. sûɯ yuu hâan nân mûɯwáannîi
3 buy car with satisfaction buy at-LOC shop that-DEM yesterday
「彼は満足げに車を買った。あの店で昨日買った。」

3. やりもらい文

ラオ語と類似の言語であるタイ語は、やりもらい表現の「与える」動詞のあとに直接目的語と間接目的語という、2 つの補語を何の文法的指標も介在することなく並列する「動詞「与える」＋与えるモノ（直接目的語）＋与えられるヒト（間接目的語）」という形を使うことができるが、ラオ語ではそれができない。補語をとる動詞は一つの補語しかとらないので、やりもらい文は例(8)(9)に示すように、「動詞①＋与えるモノ（直接目的語）＋動詞②＋与えられるヒト（間接目的語）」という、一つの動詞に一つの補語を置いた動詞連続の形を使う[7]。動詞①には与えるに至る際の具体的な動作を表す動詞を入れるかʔǎw（取る）を入れる。

(8) láaw ʔǎw pûm hày sáy
3 take book give Say(name)
「彼はサイに本をあげた」

(9) láaw sûɯ pûm hày sáy
3 buy book give Say
「彼はサイに本を買ってあげた」

上述でʔǎw（取る）を入れると述べたのは、ただ単に「モノを与える」と述べるときでも動詞①は必要で、具体的動作が特定できない場面はʔǎw を使うからである(例 10)。換言すれば、ʔǎw は必ずしも「実際に本を手に取る」という動作を含まなくてよく、いわば「与える」という所作を成立させる所与の行為の一般的かつ代表的な語として使われていると理解できるものである[8]。

(10) láaw ʔǎw khǒɔŋtɔ̂ɔn hày sáy

3 take souvenir give Say
「彼はサイにお土産をあげた」

直接目的語、即ち「与えるモノ」のみを述べるときも「ʔǎw＋モノ＋hày」という動詞連続形を使う（例 11）。タイ語では hây[9]単独で「hây（与える）＋モノ」という形が使えるが、ラオ語ではこのような形はほぼ使わない。

(11) láaw ʔǎw ŋə́n hày
3 take money give
?láaw hày ŋə́n
3 give money
「彼はお金をあげた」

「hày（与える）＋モノ」という hày 単独の形は、例（12）の給料をまさに手渡しで与えている場面ならばよい。

(12) láaw hày ŋə́n dɯ̌an
3 give money month
「彼は給料をあげた/渡した」

間接目的語、即ち「与えられるヒト」のみを述べるときも「ʔǎw＋hày＋ヒト」という動詞連続形を使う（例 13）。この場合も先の例（11）と同様に、タイ語では hây 単独で「hây（与える）＋ヒト」という形が使えるが、ラオ語ではこのような形はほぼ使わない。

(13) láaw ʔǎw hày khɔ̀y
3 take give 1
? láaw hày khɔ̀y
3 give 1
「彼は私にくれた」

「hày（与える）＋ヒト」という hày 単独の形は、例（14）のまさに自分が手渡しで与えている場面で言うのであれば使ってもよい。

(14) khɔ̀y hày láaw
1 give 3
「私は彼にあげた/渡した」

hày 単独の例(12)や(14)の使用場面から考えると、hày は「与える」というよりは「直接手渡して与える」、むしろ「渡す」という意味かもしれないが、ここではこれ以上立ち入らないことにする。hày については別稿で詳細に検討したい。

4. 動詞連続

ラオ語も他の東南アジア大陸部の諸言語と同様に文法的要素の介在なく、動詞句が並列する構文、即ち動詞連続の形の文を許す。最も多いのは 2 つの動詞句が連続した形で、4 つ以上連続する形は意味解釈の面からまれである[10]。

本稿では 2 つの動詞句が連続した形について例を挙げるにとどめる。2 つの動詞句連続の意味関係はなお一層の検討を要する（鈴木 2017）が、概ね継起的事象と非継起的事象に分けることができるので、例(15)で継起的事象を、例(16)で非継起的事象の動詞連続の文を挙げる。

(15) pǎy talàat sûɯ khɯaŋ
go market buy item
「市場へ買い物に行く」

(16) sây bík khǐan sɯɯ
use pen write name
「ペンを使って名前を書く」

例(15)は、動詞句①「市場へ行く」と動詞句②「買い物する」の事象が継起的に起こっていることを述べている。一方の例(16)は、動詞句①「ペンを使う」と動詞句②「名前を書く」が同時に起こっており、動詞句①は動詞句②の手段を述べている。

5. 基本語順の構成素

本節では、調査を通して得られた文を通して「主語＋述語＋補語」の各構成素につい

て考察する。なかでもこれらのうち、述語が文の最も中心的な構成素であることを述べる。本稿では文の最も中心的な構成素を「軸項」と呼ぶことにする。

5.1. 述語

ラオ語文の軸項は述語部分（動詞）であると考えられる。以下にそのことを裏付ける例をいくつか挙げる。

まず、先のI-2.で述べたように、句構造は「被修飾語＋修飾語」であるので、料理名である「焼き鳥」は「焼く」が「鳥」を修飾して「鳥＋焼く」、「たたいてあえたパパイヤ」は「たたく」が「パパイヤ」を修飾して「パパイヤ＋たたく（＝杵でつく）」と表現すると思われる。しかしながらラオ語では通常、例（17）（18）の「焼く＋鳥」「たたく＋パパイヤ」という動詞句を用いる[11]。

(17a) *khɔ̀y yàak kǐn kay pîiŋ
1 VOL eat chicken grill
「私は焼き鳥を食べたい」
(17b) khɔ̀y yàak kǐn pîiŋ kay
1 VOL eat grill chicken
「私は鶏を焼いたのを食べたい」

(18a) *màakhuŋ tam nîi sɛ̂ɛp
papaya chop this-DEM delicious
「このたたいたパパイヤはおいしい」
(18b) tam màakhuŋ nîi sɛ̂ɛp
chop papaya this-DEM delicious
「このパパイヤのたたいたのはおいしい」

例(19)(20)も同様で、「本屋」は「本を売る店」、「サッカーする」は「ボールを蹴って遊ぶ」と言い、動作主による具体的な動作を入れた表現を使う。例えば、例(19a)(20a)は文法的にも意味的にも一見、違和感はないが、具体的な動作を示す「動詞」のない表現は使えず、「売る」「蹴る」という動詞を入れた例(19b)(20b)の方を使わなければならない。

(19a) * hâan pûm
shop book
(19b) hâan khǎay pûm
shop sell book
「本を売る店⇒本屋」

(20a) * lìn bǎan téʔ, / *lìn futbɔ̌ɔn
play ball kick play soccer
(20b) lìn téʔ bǎan
play kick ball
「ボールを蹴って遊ぶ⇒サッカーをする」

ある事象を叙述するとき、ラオ語では原則として時間の流れに沿って構成素を並べる。一連の行為と捉えられる事象の場合は、まだ生起していなくても予測できる動作の結果や達成状態までを述べることが普通である。例えば夕食の献立を聞く時、「夕食は何を作るか」（例 21a）や「今夜は何を作るか」（例 21b）でもよさそうだが、ラオ語では普通はこのように言わず、「夜、何を作って食べるか」という結果まで述べる形を使って聞く（例 21c）。

(21a) ?ʔǎahǎan lɛ́ɛŋ het ɲǎŋ
meal evening make what
「夕食は何を作りますか」
(21b) *mûɯlɛ́ɛŋ nîi het ɲǎŋ
tonight this-DEM make what
(21c) mûɯlɛ́ɛŋ nîi het ɲǎŋ kǐn
tonight this-DEM make what eat
「今夜、何を作って食べますか」

また、移動手段を述べるとき、道具や手段の前置詞を使って「何で学校へ行きますか」と言えなくもないが、実際には前置詞句はあまり使わず、「何に乗って行きますか」という動作主の一連の具体的行為を述べる形を使う（例 22）。

(22a) *pǎy hóoŋhían dɔ̌oy ɲǎŋ

go school by what

(22b) khii ɲǎŋ pǎy hóoŋhían

ride what go school

「何に乗って行きますか」

諾否疑問文の応答文は、他の要素ではなく動詞を使って答えることが必要条件である。補語である名詞句の部分のみを聞いている場合でも応答文では動詞を使って答えなければならない。応答文だけではなく、例えば動詞句内の一部である名詞句を特に伝えたい場合でも動詞は繰り返す方が自然であるとされる。また、ラオ語ではわかっていることは省略するが、動詞の場合はわかっていても省略しないことが多い[12]。このようなことから動詞は最も省略しにくい構成素であると言える。応答文としての応え方や省略しにくいという情報構造的な観点からも文の軸項は述語部分（動詞）であると考えられるのである。

最後に文法構造とは直接関係はないが、ラオ語の特徴として、一義的には有情物が働きかける具体的な動作・意志を叙述する文を使うことが基本であるということを述べ、このことも述語動詞が軸項として考えられる現象の一つであることを示したい。

例(23)は誰かが随意的に「置く」という文であるが、主語を補足しようにも前方照応が不可能で、仮に一般の「人々」と入れてしまうと文の意味そのものが異なってしまう。「置かれている」という受身文を使ってもよさそうであるが、実際には受身文は使えない。極端なことを言えば(23)は主語がない文かもしれないが、このような文でも「随意的に行った」という述語動詞を使って叙述をすることが普通なのである。

(23) pûm nân wáaŋ wây yuuthə́ŋ tóʔ

book that-DEM put keep on table

「あの本は机の上に置かれている」

5.2. 補語

補語は動詞の不可欠要素であることから項としては動詞と最も結束性が強いと言える。それは、互いに意味の補完関係にあり、動詞と補語の間にはいかなる文法機能語も置くことはできない[13]ということから明らかである。特に補語の名詞句が「不定」で、虚補語のようなときは、動詞と共に用いて、まるで一語の複合語、あるいは熟語のよう

に捉えることができる。本稿でいう虚補語とは、動詞の意味に新しい意味を加えるというよりは、ただ、完全な形にするために、所与の動作の最も一般的で特徴的かつ代表的な意味を持つ語のことをさす。このような補語のときは「動詞＋補語」という動詞句全体で一語と考えられるものである。例えば、例(24)は、動詞「食べる」だけでは文として成立せず、補語「ご飯」は必須項であるが、その意味は、米を炊いた「ご飯」ではなく、最も一般的かつ代表的な「食べもの」という意味で用いられている。つまりここでは「食べる＋ご飯」全体で「食事する」という意味として解釈される。

(24)　khɔ̀y kǐn khàw
　　1　　eat　rice
　「私はご飯を食べる」

5.3.　主語

主語は独立性が強い。なぜなら主語を述べなければ文が成立しない場合もあれば、命令文や例(24)の存在文のように主語が不要な文もあるからである。主語を必要とする文では、主語は述語の働きかける具体的な動作・情意の主体や属性の持ち主などであり、述語と同様に文の必須項となる。また、補語と異なり、述語との間に他の構成素を介在させてもよいことや省略しやすい構成素であることから独立性が高いと言える。

Ⅱ．情報構造上の特徴（１）：主題

1.　「主題」について

Iwasaki(2006, 2005)は、ラオ語と類似のタイ語に関する主題について、下記特徴を有すると述べている。

１）主題を表す名詞句は文頭、即ち述語動詞の左側に位置する。

２）主題を表す名詞句は「定」で、前述されているものである。したがって、先行文脈と前方照応が可能である。情報上は旧情報である。

３）主題を表す名詞句は後述部分において具体的な記述がなされており、主題の内容についての後方照応が可能である。

本稿においてもまずは上記１）から３）を満たすものを「主題」と考え、詳細にラオ

語文の述語動詞の前、即ち左側に置かれる項を検討した。すると上述の主題条件１）２）３）を満たすものと２）を満たさず、主題条件１）３）のみを満たすものがあることがわかった。

（１）上述の主題条件１）２）３）を満たすもの

上述の主題条件１）２）３）を満たすものは、「～について」と言った話題を明示する主題である。従来の基本語順においては、本来、動詞の後ろに置く要素であるが、対比表現などのときに左方転移して文頭に置く項のことである。このような要素には、主題であることを明示する助辞や書く場合は「,」、話す場合はポーズを置くことが多い。

例えば、下例(25)(26)の下線部は、基本語順では「。。」に置かれる構成素であるが、いわゆる左方転移によって主題化が起きていると考えられるものである。

(25) <u>lûaŋ mía kaw mía kɛɛ</u> mɛɛ bɔɔ thŭɯ 。。dɔ̀ɔk （p.101.22.）[14]
story wife old wife old mother NEG mind PTCL (PTCL:particle)
「再婚で年いっている女だってこと、お母さんは気にしないよ」

(26) <u>wîak náa hóom nân</u> nɔ̂ɔŋ phíaŋtɛɛ phùu cát bɛŋ 。。thawnân （p.92.l.17）
work paddy gather that-DEM younger sister only person arrange divide only
「あの共同水田での役目は、私はただ（田を）分けるだけなんだけど」

（２）上述の主題条件１）３）を満たすもの

上述の主題条件１）３）を満たすものは、「時」や「場所」などの叙述内容の場面範囲の設定を明示する主題である。従来の基本語順において、動詞の後ろに置かれている要素とは考えられないものである。即ち、もとから文頭に置かれている項である。

例えば下例(27)の新たなシーンが始まるト書き出だしの文や例(28)の主人公が伯父さんとの会話中に別のことを述べて話をそらせたいために発言した文の文頭部分（下線部）に注目したい。この(27)(28)の文頭は叙述内容が発生する「時」を述べているが、文脈をさかのぼって前方照応ができず、全く新しい場面転換の出だしの部分である。この「時」部分は省略できず、なおかつ新情報である。このことは先の Iwasaki(2006, 2005) ２）を満たさないものである。

(27) <u>tɔ̌ɔn sâw</u> náy thɔ̂ɔnthin sónnabót, ɲáam kǎaŋ ladŭu hɔ̂ɔn, khàwnáasɛ́ɛŋ phúam ŋáam (p.7.l.1)

section morning in region　countryside time middle season　hot　rice-field　PROG　beautiful
「暑季中ごろの田舎の朝は、水田の稲がちょうど美しくなる頃である」

(28) <u>mûɯʔɯɯn sâw</u>　lúŋ　máa　tɯɯm　（p.65.l.20.）
tomorrow　morning uncle　come　again
「明日の朝、伯父さん、また来てよ」

ラオ語は時制を表す文法的なマーカーはなく、過去の事象と現在の事象が同じ形の文になることを許す。したがって、話し手が「いつ」のことであるかを最初に述べて聞き手に「いつ」のことであるかをわかりやすくする、ということが伝達を円滑にする技巧なのであると考えられる。即ち、「昨日」「明日」という時を表す語を文頭に置いて、いつの事象であるか明示し、聞き手に叙述内容を伝達しやすくするのだと考えられる。

例(29)「病室の中で」や例（30）「一般に」のように、叙述内容が起こる場所や範囲などを明示する場合も同様である。叙述内容の範囲設定を明示することによって、聞き手に叙述内容を伝達しやすくしていると考えられる。

(29) yuunáy hòŋ khón cép　lǎay khón phúam　kǐn khàw
in　room person painful many person　PROG　eat　rice
luk khùn naŋ kɔɔ míi　nɔ́ɔn　yuu　kɔɔ míi
wake rise　sit　LINK exist　sleep　PROG　LINK exist　(p.99.l.1)
「病室の中では多くの人が食事中だった。起き上がって座っている人もいれば、寝ている人もいた。」

例(29)は新たなシーンが始まるト書き出だしの文であり、「病室の中」は前方照応が不可能であるので、明らかに新情報の部分ではない。このことも先の Iwasaki(2006, 2005)２）を満たさないものである。例(30)はもし、下線部が左方転移によって文頭に置かれた主題であれば、右方転移で文末に置いても文法的に正しい文のはずである。ところがそれができない(例 30b)。これらのことはとりもなおさずもとから文頭に位置している項であることを示している。

(30a)　<u>dǒoy thuapǎy</u>, khón láaw mak　muan
by　general　person Laos　like　fun
(30b) * khón láaw mak　muan <u>dǒoy thuapǎy</u>

person Laos like fun by general
「ラオス人は楽しいことが好きだ」

以上のことからラオ語の主題は、１）文頭に置く、２）左方転移で主題化することによって話題を明示する主題と叙述内容の場面範囲の設定を明示する主題の２種類がある、３）話題を明示する主題は旧情報であるが、場面範囲の設定を明示する主題はそのかぎりではない、とまとめることができる。

次節より各構成素に「焦点」がある場合の語順を詳細に検討することにする。

2. 「主語」が「主題」であるとき

ラオ語では、動詞の前に具体的な動作・情意の主体や属性の持ち主などである主語を置くが、それがある談話において、主題の一般的な特徴として挙げた前節 1.の１）から３）のような情報を担うときは情報構造上、主題となる。一般に「主題」は情報構造上の概念で、「主語」は統語論上の概念であると言われているが、この場合は主語兼主題なのである。

次の(31a)(32a)は先行文と後続文が対比的な内容となっており、動詞の前の主語は対比されている主題であると解釈できる例である。

(31a) khɔ̀y dǐicǎy, tɛɛ láaw bɔɔ dǐicǎy
1 glad but 3 NEG glad
「私は嬉しいが、彼は嬉しくなかった」

(32a) láaw sûɯ lot sǐi dɛɛŋ, khɔ̀y bɔɔ dây sûɯ
3 buy car color red 1 NEG ACHV buy
「彼は車を買ったが、私は買わなかった」

(31a)も(32a)も主語はすでに文頭に位置しており、語順の変動はない。このように語順の変動がないと、主題ではない主語との区別がつかない、あるいは主題として伝わりにくいこともありうる。もし、主語項を主題として取り立てたい場合は、下例(31b)(32b)のように主語の後ろに「hàn」などを置く。「hàn」は主語の後ろに置いて、「～というものは」「～については」と名詞句を明示化する機能があることから、「hàn」は主題

マーカーであるということができる[15]。

(31b) khɔ̀y hàn dǐicǎy, tɛɛ láaw hàn bɔɔ dǐicǎy
1 TM glad but 3 TM NEG glad (TM:topic marker)
「私は嬉しいが、彼は嬉しくなかった」

(32b) láaw hàn sûɯ lot sǐi dɛɛŋ, khɔ̀y hàn bɔɔ dây sûɯ
3 TM buy car color red 1 TM NEG ACHV buy
「彼は赤い車を買ったが、私は買わなかった」

(33) nɔ̂ɔŋsǎaw tǒo hàn kùap pǎy lɛ̂ɛw （p.21.l.12.）
younger sister 2 TM almost go PRF
「おまえの妹は行っちゃうところだったよ」

もう一つの明示方法として、例(34)のように主語部分を文頭に置き、その直後にそれと同じものを指す主語相当の代名詞を主語として繰り返す、という形をとって主題化することもある。

(34)phɔɔ mɛɛ lûuk phən sǐa lɛ̂ɛw （p.103. l.7.）
father mother child they die PRF
「僕の両親はもう死んでいるよ」

例(35)は、主題マーカーを置いて、さらに同じものを示す代名詞の主語を置いた形である。

(35) ʔǎn khǎw waa hàn, mán mɛɛn thɛ̂ɛ wáʔ （p.101.l.5.）
CLF 3 say TM that-DEM COP-FM true PTCL (FM:focus marker)
「彼が言っていたのは本当なんだね」

3. 「補語」が「主題」であるとき

例(36)Q「誰があのお菓子を食べたの？」という疑問文に対する応答文(36)A は、補語の「お菓子」を対比した「あのお菓子は～、でも他のお菓子は～」という文である。このときは「あのお菓子」も「他のお菓子」も左方転移し、文頭に置かれることによっ

て「主題化」される。

(36)Q:mɛɛn　phǎy kǐn khanǒm nân
　COP-FM who　eat　sweet　that-DEM
　「誰があのお菓子を食べたのですか？」
A: khanǒm nân　súk kǐn pǎy lɛ̂ɛw, tɛɛ khanǒm ʔɯɯn ɲáŋ lʊ̌a　yuu
　sweet　that-DEM Suk eat　go　PRF　but　sweet　other　still remain PROG
　「あのお菓子はスックが食べちゃった、でも他のお菓子はまだ残っている」

このように本来は動詞の後ろに置かれる補語（ここでは名詞句）であっても、それを文頭に置くことにより、文の主題となることができそうである。ところがどのような補語でも主題化されるわけではない。補語が主題化できるのは、補語が「定」の名詞句で、明らかに旧情報であるということが必須である。例えば、先のI-5.2 で述べた「kǐn khàw」（食べる＋ご飯⇒食事する）の「ご飯」は「定の名詞句」ではない。したがって動詞と補語の結束性が非常に強く、補語「ご飯」のみを切り離して文頭に置く文はまず非文である（例 37）。ところが何を食べたのかが話題になっていて、「ご飯は食べなかったが、パンは食べた」という場面では、補語「ご飯」は「パン」に対比される「定の名詞句」であるので、文頭に置いて主題化できる（例 38a, 38b）。ただし、このときも原則として主題マーカーを必要とすることから、補語は単に左方転移をして主題化ができるということではないと言える。

(37)　*khàw khɔ̀y kǐn
　rice　1　eat
　「ご飯は私が食べる」

(38a)　?khàw hàn khɔ̀y bɔɔ kǐn, tɛɛ khàwcii hàn kǐn
　rice　TM　1　NEG eat　but　bread　TM　eat
　「ご飯は、私は食べなかったが、パンを食べた」

(38b)　khàw hàn khɔ̀y bɔɔ kǐn, tɛɛ kǐn khàwcii
　rice　TM　1　NEG eat　but eat　bread
　「ご飯は、私は食べなかったが、パンを食べた」

ここで注目すべき点は、対比する「ご飯」と「パン」を比較対照する文において、対比する文同士が同一の文型である必要はない点である。母語話者によれば、「ご飯」と「パン」の両方を主題化している（38a）よりも（38b）の形の方が自然であると言う。このことは何を最も伝えたいのか、ということと関係がある。この場面では、「食べたもの」が話題になっているので先行文で「ご飯」を主題化させ、「パン」が最も伝えたいことであるので後続文で「パン」を文末に置く（後述III-3.）形が最も自然でよく使う形ということになる。

対比文の語順について、例（39）の応答文でさらに詳細にみていく。□に囲った部分が対比している名詞句「お菓子」である。

(39) Q: súk kǐn khanǒm nân lêɛw bɔ̌ɔ
Suk eat sweet that-DEM PRF Q
「スックはもうあのお菓子を食べてしまいましたか？」
A : kǐn lêɛw, khanǒm nân, tɛɛ khanǒm ʔɯɯn muu láaw kɔɔ kǐn lêɛw
eat PRF sweet that-DEM but sweet other friend 3 LINK eat PRF
「はい（食べました）。あのお菓子は。でも他のお菓子は彼の友人が食べてしまいました」
A’ : kǐn khanǒm nân lêɛw, tɛɛ khanǒm ʔɯɯn muu láaw kɔɔ kǐn lêɛw
eat sweet that-DEM PRF but sweet other friend 3 LINK eat PRF
「あのお菓子を食べました。でも他のお菓子は彼の友人が食べてしまいました」
A” : khanǒm nân kǐn lêɛw, tɛɛ khanǒm ʔɯɯn muu láaw kɔɔ kǐn lêɛw
sweet that-DEM eat PRF but sweet other friend 3 LINK eat PRF
「あのお菓子は食べました。でも他のお菓子は彼の友人が食べてしまいました」

例(39) A から A”は、補語の「お菓子」を対比した「あのお菓子はスックが食べたが、他のお菓子は彼の友達が食べた」という応答文であるので、先の(36)と同様に A”が応答文として最も自然な適格文であると考えられるが、文の適格度は A、A’、そして A”の順となる。

そこでこれらの応答文を順に検討し、その理由を考えていく。応答文は諾否疑問文に対してまず肯定「食べた」、あるいは否定「食べていない」と応答することが必要条件である。したがって A は、まず「食べた」と返答している、という点で応答文として最適格文とされる。そしてそのあとに話し手が「食べたもの」を付け加えている形である。即ち、何について答えたのか、改めて「あのお菓子」を喚起し、後続文で対比構成素で

ある「他のお菓子」を左方転移することにより、主題として明示して「他のお菓子は彼の友人が食べた」という形となっている。次に A'は、「食べた」だけで肯定の応答として十分であるところをわざわざ「あのお菓子」を述べることによってかえって少しくどい応答文となっている。そして後続文で A と同様に「他のお菓子」を左方転移することで主題化し、「他のお菓子について言えば食べたのは彼（先行文）ではなく、友人である」ことを示した形であると捉えられる。一方の A"は、「あのお菓子」と「ほかのお菓子」の両方を左方転移によって主題化している文であるが、この場合、応答文としてはまずは「応答」するという形を使っていないために適格度が下がるのである。

以上、例(36)から(39)で対比場面の２文連続形をみてきた。その結果、補語の主題化は対比文においてよく使われ、最も自然でよく使う形は、先行文でも後続文でも何を最も伝えたいことなのか、その構成素を文末に置くということを基準に語順が決まることがわかった。それは２文連続形に限って言えば、対比する補語①を先行文の文末に置き、対比する補語②を後続文の文頭に置いて主題化する形である。このことは談話がスムーズに進むための文連続産出の原則を示していると言える。

4. やりもらい文における「主題」

やりもらい文については直接目的語「与えるモノ」と間接目的語「与えられるヒト」の主題化を検討する。

まず、直接目的語「与えるモノ」は左方転移して主題化できる。しかし例(40)に示すように、主題化したい項を文頭に左方転移するだけでは不自然で、直接目的語のあとに主題マーカーを入れなければならない[16]。

(40a)?pûm, khɔ̀y ʔǎw hày súk, sɔ̌ɔ, khɔ̀y ʔǎw hày sáy
book 1 take give Suk pencil 1 take give Say

(40b) pûm hàn khɔ̀y ʔǎw hày súk, sɔ̌ɔ hàn khɔ̀y ʔǎw hày sáy
book TM 1 take give Suk pencil TM 1 take give Say

「本は私はスックに挙げて、鉛筆はサイにあげた」

また、例(41)のように主題化したい名詞句を文頭に置き、その後、コピュラ mɛɛn を置いて、名詞(句)分裂文にする[17]方法もある。

(41) pûm mɛɛn khɔ̀y ʔǎw hày súk, sɔ̌ɔ mɛɛn khɔ̀y ʔǎw hày sáy
book COP-FM 1 take give Suk pencil COP-FM 1 take give Say
「本は私がスックにあげたもので、鉛筆はサイにあげたものである」

一方の間接目的語は一見、左方転移による主題化が可能だが、hàn という主題マーカーを置き、さらには主語である「与えるヒト」がないと非文となる。これは動作主である主語を動詞の前に置くことが文の基本語順であるので、動詞の前に「ヒト」を表す名詞句が 1 つあると、それは通常は動作主である「与えるヒト」と解釈されるからである（例 42a, 42b）。唯一、使用できるのは例(42c)のように、「与えるヒト」を明示している場合である。また、この場合も(41)と同様に、対比がより明確になる名詞分裂文を使ってもよい（例 43）。

(42a)* súk, ʔǎw pûm hày
Suk take book give
(42b)* súk hàn, ʔǎw pûm hày
Suk TM take book give
(42c) súk hàn, khɔ̀y ʔǎw pûm hày, sáy hàn, khɔ̀y ʔǎw sɔ̌ɔ hày
Suk TM 1 take book give Say TM 1 take pencil give
「スックには私は本をあげて、サイには鉛筆をあげた」

(43) súk mɛɛn khɔ̀y ʔǎw pûm hày, sáy mɛɛn khɔ̀y ʔǎw sɔ̌ɔ hày
Suk COP-FM 1 take book give Say COP-FM 1 take pencil give
「スックは私が本をあげた人で、サイは鉛筆をあげた人である」

以上のことから、やりもらい文では１）直接目的語は主題マーカーを伴って主題化できる、２）間接目的語は主題化しにくく、敢えて主題化するならば必ず主題マーカーを伴うと同時に主語も述べなければならない、３）名詞分裂文を使って主題化する、のいずれかの形を使うということができる。

5. 動詞連続文における「主題」

動詞連続構文については、動詞句が 2 つ連続する非継起的事象である「作る＋カォプン（料理名）＋できる」で主題化を検討する。

「カォプンは作れるが、カォソーイ（料理名）は作れない」と動詞連続中にある補語だけを取り出し主題化して対比的に述べる場合、先のⅡ-3.補語の場合と同様に、主題マーカーを必要とすることが原則である。

(44a) ? khàwpûn het pěn, tɛɛ khàwsɔ́ɔy het bɔɔ pěn
Khawpun(cuisine) make PSBL but khawsooy(cuisine) make NEG PSBL

(44b) ? het khàwpûn pěn, tɛɛ khàwsɔ́ɔy het bɔɔ pěn
make Khawpun PSBL but Khawsooy make NEG PSBL

(44c) het khàwpûn pěn, tɛɛ khàwsɔ́ɔy hàn, het bɔɔ pěn
make Khawpun PSBL but Khawsooy TM make NEG PSBL

(44d) khàwpûn hàn, het pěn, tɛɛ khàwsɔ́ɔy hàn, het bɔɔ pěn
Khawpun TM make PSBL but Khawsooy TM make NEG PSBL
「カォプンは作れるが、カォソーイは作れない」

二連続文の形についても先のII-3.と同様で、(44d) も使えることは使えるが、対比要素①を先行文の文末部分に置き、対比要素②を後続文の文頭に置く (44c) が最も自然でよく使う形とされる。

6. 「主題」と「語順」

以上のことからラオ語の主題と語順についてまとめると次のようになる。

１）主題は原則として文頭に置く。

２）主題には、①左方転移で主題化することによって話題を明示する主題と、②いつ、あるいはどこ、という叙述内容の場面範囲の設定を明示する主題の 2 種類がある。①は旧情報であり、②はその限りではない。

３）主語を主題化する場合には主題マーカーを置くか、文頭に置いて主題化し、同じ内容を示す代名詞を主語としてそのあとに述べる形を使う。

４）補語（名詞句）が左方転移によって主題化できるのは、補語が「定」の名詞句で、明らかに旧情報であるということが必須である。主題マーカーを置くことが望ましい。

５）補語の主題化は、対比表現文においてよく使われる。最もよく使う対比文の形は、先行文末に対比する補語①を置き、後続文頭に対比する補語②を置いて主題化する形である。対比する補語①も②も文頭に置いて主題化した同じ構文を並べる形を使ってもよ

い。

Ⅲ．情報構造上の特徴（２）：焦点

1.　「焦点」について

焦点はII-1.の主題と概ね対称的な意味を有するものと捉える。従って下記特徴を有するものとする。

１）　焦点を表す名詞句は文末＝述語動詞の右側に位置する。

２）　焦点を表す名詞句は前述されていないものであるので、先行文脈と前方照応は不可能である。情報上は新情報である。

３）　焦点を表す名詞句は後述文脈と後方照応が可能である。

上記１）から３）をふまえて詳細にラオ語文の述語動詞の後ろ、即ち動詞の右側に置かれる項を検討した結果、ラオ語は述語が文の軸項であるので、動詞句中の動詞以外の構成素のみが焦点化されることがあまりなく、動詞句全体が焦点であると解釈されることが普通であることがわかった。換言すれば焦点は文の中で１つの構成素だけとは限らなそうである。このことを以下に検討する。

例えば「その本を[18]読んだかどうか聞きたい」とき、応答文は下記２つとも適格文であるとされる。

(45) Q: câw ʔaan puûm hǔa　nân　lɛ̂ɛw bɔ̌ɔ
　　2　read　book CLF that-DEM PRF　Q
　「あなたはもうその本を読みましたか？」
　A: mɛɛn, (ʔaan) hǔa　nân
　　right　read　CLF　that-DEM
　「はい、その本です」
　A’: ʔaan　lɛ̂ɛw
　　read　PRF
　「読みました」

A は、名詞句「その本」のみに焦点があり、A’は動詞句「その本を読んだ」に焦点が

ある応答文である。このことは例 (45) Q のような質問文があると、文末項の「その本」のみと動詞句である「その本を読む」に焦点があるかのどちらかに解釈されることを示している。

次に「その本を読んだかどうか聞きたい」とき、質問文は 2 つ考えられる。一つは動詞句全体に焦点がある聞き方で、もう一つは「その本」を左方転移で文頭に置いて主題化し、述語動詞「読む」のみに焦点がある聞き方であり、これら２文とも適格文となる。コンサルタントによればどちらもよく使うとのことである。

(46) Q1:câw ʔaan pûm hŭa nân lêɛw bɔ̌ɔ
2 read book CLF that-DEM PRF Q
「あなたはもうその本を読みましたか？」
Q2:pûm hŭa nân, câw ʔaan lêɛw bɔ̌ɔ
book CLF that-DEM 2 read PRF Q
「その本はあなたはもう読みましたか？」

例(46)の応答文(47)は述語動詞「読む」を使って答えるのが適格文である。「読む」の後ろに「その本」を述べると焦点がその本に移り、応答文として不適格文になる。「その本」を主題化して文頭においてもよさそうであるが、「その本」と対比している内容の後続文がないと何かたりない感じがするとのことであった。

(47) A: ʔaan lêɛw
read PRF
「読みました」
A’: *ʔaan pûm hŭa nân lêɛw
read book CLF that-DEM PRF
A”: ? hŭa nân ʔaan lêɛw
CLF that-DEM read PRF

以上のことからラオ語の「焦点」は、1）話し手が聞き手に最も伝えたいことである、２）原則として文末に置くが、一つの構成素とは限らず、特に動詞句の動詞は焦点と捉えられやすい、とまとめることができる。

次節より各構成素に「焦点」がある場合の語順を詳細に検討する。その際、諾否疑問

文とその応答文の形を見ていくことにする。それは、疑問文はまさに「聞きたいこと」が焦点であり、応答文は「応えたいこと」が焦点であるので、焦点がどこにあるのかわかりやすいからである。もちろん応答文には、わざと少し遠回しに応えると言った応え方もあるであろう。今回は焦点の文における位置を検討したいので、疑問文に対して「応える」という点について重点を置き、使用許容度が高い文を適格文（上田 1986）として語順をみていく。

2.　「主語」が「焦点」であるとき

前節で原則として焦点は文末に位置すると述べたが、主語が焦点であるときは動詞の後ろに右方転移することはできない。その代わりに焦点であることを明示するマーカーの mɛɛn を前に置いて焦点化する（例 48）。また、文頭に míi（ある・いる）を置いて、存在文にすることにより、焦点が述語動詞の右方に位置することで焦点化することもできるが、この形はあまり使わない（例 49）。

(48a) * ɲǎŋ tók
what fall

(48b) * tók ɲǎŋ
fall what

(48c) mɛɛn ɲǎŋ tók
FM what fall
「何が落ちたのですか？」

(49) míi ɲǎŋ tók
exist what fall
「何が落ちているのですか？」

次の例（50）は、誰が本をスックにあげたのか？ということを聞きたい、つまり「誰」という主語に焦点があるときの疑問文と応答文である。

(50) Q:mɛɛn phǎy ʔǎw pûm hày súk
FM who take book give Suk
「誰がスックに本をあげたのですか？」

A *khɔ̀y ʔǎw hày súk
1 take give Suk

A’ khòy
1
A” mɛɛn khòy
FM 1
「私です」

疑問文は mɛɛn を「誰」の前に必ず置く。一方の応答文は与えたヒトである「私」に焦点があるので、その後ろに動詞句を続けることはできない。応答文としては例(50)A’の「私」のみの形か、(50)A”の焦点マーカーである mɛɛn を「私」の前に置く形が適格文となっている。

3. 「補語」が焦点であるとき

補語は原則として文末に置くことで焦点化されると言ってよい。補語の後ろに位置するような副詞句は置いてはいけない。例（51）は文末の補語「赤い車」、または補語の一部分で最後尾構成素である「赤」に焦点がある文である。

(51) *láaw sûɯ lot sǐi dɛɛŋ yuu hâan nân
3 buy car color red at-LOC shop that-DEM
láaw sûɯ lot sǐI dɛɛŋ
3 buy car color red
「彼は赤い車を買った」

実は補語のみは焦点化しにくい。特に補語が「不定」の名詞句の場合は動詞句全体に焦点があるように解釈される。なぜなら補語は動詞と結束性が強いからである。補語が「定」の場合、補語のみに特化して焦点化する手段として、補語の前に焦点マーカーmɛɛnを置いて焦点であることを明示する名詞分裂文の形を使うこともある。

(52) láaw sûɯ mɛɛn lot sǐi dɛɛŋ
3 buy COP-FM car color red
「彼が買ったのは赤い車だ」

けれども一般に分裂文は堅苦しい感じがしてあまり使わない。動詞句全体に焦点があ

る形を使うことが多いというのが事実である。例えば、「最も好きな料理はオラーム（料理名）である」は、「最も」という副詞が動詞句の後ろに置かれてしまうので、「オラーム」のみを焦点化する文としては分裂文しか使えない（例 53）。けれども実際には動詞句全体に焦点がある形の方がよりよい適格文であると判定される（例 54）。

(53) ? ʔǎahǎan thii khɔ̀y mak thiisút mɛɛn ʔɔ́ʔlǎam
meal REL 1 like most COP-FM Olaam(cuisine)
「私が一番好きな料理はオラームだ」

(54) khɔ̀y mak ʔɔ́ʔlǎam thiisút
1 like Olaam most
「私はオラームが一番好きだ」

4. 「動詞連続」における「焦点」

本節では、動詞連続のうち、「やりもらい文」「継起的動詞連続」「被継起的動詞連続」について検討する。

4.1. やりもらい文

やりもらい文の直接目的語に焦点がある場合の諾否質問文と応答文は次のとおりである。

(55)Q: câw ʔǎw ɲǎŋ hày súk
2 take what give Suk
「あなたはスックに何をあげましたか？」
Q ':câw ʔǎw ɲǎŋ hày
2 take what give
「あなたは何をあげましたか？」
Q": * câw ʔǎw hày súk ɲǎŋ
2 take give Suk what
Q"': * câw hày súk ʔǎw ɲǎŋ
2 give Suk take what

A: pûm

book

「本です」

A’:ʔǎw pûm hày

take　book　give

「本をあげました」

A”:*ʔǎw hày pûm

take　give　book

A”’:*ʔǎw pûm

take　book

例(55)諾否疑問文より焦点が直接目的語にあっても文末への右方転移はできず、後ろに位置する間接目的語を述べてよいことがわかる。ところが応答文では直接目的語のうしろに位置する間接目的語は述べてはいけない。これはとりもなおさず直接目的語に焦点があるからである。諾否疑問文のみ後続要素である間接目的語を置いても適格文とされるのは、「何」という疑問は「聞きたいこと」、即ち焦点であることが明白であるという理由による。この場合も先の例(52)と同様に名詞分裂文にして焦点の「何」のみを文末に置く聞き方をしてもよい。その際の応答文は焦点のみか、焦点マーカーをつけた形で応える。

(56)Q: câw ʔǎw　hày　súk　mɛɛn　ɲǎŋ

2　take　give　Suk　COP-FM　what

「あなたがスックにあげたのは何ですか」

A: pûm

book

A’: mɛɛn　pûm

COP-FM　book

「本です」

4.2.　継起的動詞連続

継起的な事象を表す動詞連続では、「学校へ行ってサッカーをする」の諾否疑問文と応答文を検討する。まず、後ろの動詞句を聞く諾否疑問文「学校へ行って何をしたか？」は、疑問詞「何」を後ろの動詞句の補語の位置にそのまま置いた形が適格文として使われる。そしてその応答文は後ろの動詞句のみを使って応える（例 57)。

(57) Q: pǎy hóoŋhían het　nǎŋ dee
go　school　do　what PTCL
「学校へ行って何をしたんですか」
A: lìn téʔ bǎan
play kick ball
「サッカーをしました」

一方、前の動詞句を聞く諾否疑問文「どこでサッカーをしたか？」は、疑問詞「どこ」を前の動詞句の補語の位置にそのまま置いた形では非文となり、「どこ」を文末に置いた形が適格文として使われる。そしてその応答文は場所のみか、場所を表す前置詞を伴った形で応える（例 58）。

(58) Q: *pǎy sǎy　lìn téʔ bǎan
go　where play kick ball
Q': pǎy lìn　téʔ　bǎan　yuu　sǎy
go　play　kick ball　at-LOC　where
「サッカーをしにどこへ行きましたか」
A:yuu　hóoŋhían
at-LOC　school
A:hóoŋhían
school
「学校です」

以上のことから継起的動詞連続の場合、後ろに位置する動詞句全体を聞くことはでき、前に位置する動詞句は聞けないということがわかる。このことも文末に焦点があることを示すものである。

4.3.　非継起的動詞連続

非継起的な事象を表す動詞連続では、「カォプン（料理名）が作れる」で諾否疑問文と応答文を検討する。「作れる」で一つの事象なので、動詞連続「作る+カォプン＋できる」全てを使わなければならない。したがって補語「作れるモノ」が聞きたいことであっても文末の「できる」を含む動詞句全体に焦点がある聞き方をする。そしてその応答

文は動詞句全体で応える形が最適格文であるが「作れるモノ」だけを応える形でもよい。

(59) Q: het <u>nǎŋ</u> pěn
make what PSBL
「何を作れますか？」
Q’:* het pěn ɲǎŋ
make PSBL what
A: <u>khàwpûn</u>
Khawpun(cuisine)
「カォプンです」
A’: <u>het khàwpûn pěn</u>
make Khawpun PSBL
「カォプンを作れます」
A”: * het khàwpûn
make Khawpun
A”’:* het pěn khàwpûn
make PSBL Khawpun

敢えて「作れるモノ」を取り出す聞き方は、ほとんど使わないが焦点マーカーの mɛɛn を伴って文頭に置く形にする。このときの応答文は「作れるモノ」のみを応えるか、「作れる」を先に述べ、とりたて焦点マーカーの tɛɛ（～だけ）を伴って「モノ」を文末に置く形を使う。

(60) Q: <u>mɛɛn ɲǎŋ</u> het pěn
FM what make PSBL
「何が作れるのですか」
Q’: *thii het pěn mɛɛn ɲǎŋ
REL make PSBL FM what
A: <u>khàwpûn</u>
Khawpun
「カォプンです」
A’: het pěn tɛɛ <u>khàwpûn</u>
make PSBL only-FM Khawpun
「カォプンだけ作れます」

5.　「疑問詞」における焦点

疑問詞は最も聞きたいことなので「焦点」にあたる。従って例(61)から(65)に示すように原則として文末に置く。

(61) câw　kə̀ət　yuusǎy
2　born　where
「あなたはどこで生まれましたか」

(62) láaw siʔ　kǐn　nǎŋ
3　IRR　eat　what
「彼女は何を食べるんですか」

(63) láaw siʔ　máa　mûɯdǎy[19]
3　IRR　come　when
「彼女はいつ来ますか」

(64) láaw siʔ　máa　néɛwdǎy
3　IRR　come　how
「彼女はどうやって来ますか」

(65) láaw siʔ　máa　káp　phǎy
3　IRR　come　with　who
「彼女は誰と来ますか」

ただし、前述Ⅲ-2.でも述べたが、叙述内容の主語の部分を聞きたい場合は、文末への右方転移ができない。このときは例(66)（67)のように焦点マーカーmɛɛn を前に置いて焦点化する。

(66) mɛɛn　nǎŋ　tók
FM　what　fall
「何が落ちたのですか」

(67) mɛɛn phǎy siʔ　pǎy múaŋ　láaw
FM　who　IRR　go　country　Laos
「誰がラオスに行くのですか」

原因[20]を問う pěnɲǎŋ（なぜ）は文頭に置くのが普通である。その理由は、「文は時間の流れに沿って述べる」という大原則に従うためである。原因と結果は、原因が先に起こり、結果が必ずあとに起こるものである。従って、原因部分である「なぜ」は結果を述べる節の前に置かなければならないのである。

(68) pěnɲǎŋ láaw bɔɔ máa
why 3 NEG come
「なぜ彼女は来ないのですか」
*láaw bɔɔ máa pěnɲǎŋ
3 NEG come why

(69) pěnɲǎŋ yàak hày phɔɔ láaw ʔɔ̀ɔk múa wáy thêɛ (p.105.l.16)
why VOL CAUS father 3 go out return early true
「なぜお父さんをそんなにすごく早く帰らせたいのですか？」

6. 「焦点」と「語順」

以上のことからラオ語の焦点と語順についてまとめると次のようになる。

1） 焦点は原則として文末に置く。

2） 主語に焦点がある場合、文頭の位置のままで焦点マーカーを前に置いて焦点化するか、主語の後ろに位置する構成素を置かない。

3） 動詞に焦点がある場合、補語である名詞句が「不定」の場合は動詞の後ろに位置するにもかかわらず述べてもよい。

4） 補語と動詞の結束性が強いため、「不定」の補語の場合、補語のみに焦点があるとは捉えにくく、動詞句全体に焦点があると捉えられる。「定」の補語も同様であるが、敢えて焦点化する手段として、焦点マーカーを補語の前に置いた名詞分裂文の形を使うこともある。

5） 動詞連続型は原則として一番後ろの動詞句全体に焦点があると捉えられる。

Ⅳ．まとめ

本稿の第I章では、各場面において話し手が使う最も自然な文はどのような語順か、という観点に立って基本語順を記述することを試みた。次に第II章では「主題」、第III章では「焦点」という観点から文における各構成素の位置について検討した。その結果、ラオ語文の語順について下記のことが明らかになった。

１）基本語順は、「主語＋述語＋補語」である。これらのうち文の最も重要な要素である文の軸項は「述語」である。述語は動作や状態を表すので、多くの場合、動詞である。動詞の前後に統語的制約や情報構造的制約の上に立って必要構成素を置いていくことにより、話し手の最も伝えたい内容を反映した適格文が生成される。それは統語的制約による基本語順があり、それに対する左方転移や右方転移によって、「主題化」「焦点化」されるという考え方では説明できない部分がある。ラオ語においては構成素の移動と捉えず、伝達機能という言語の最も重要な機能、即ち「いかにわかりやすく正確に伝えるか」という観点から動作・状態を叙述する軸項の前後に必要な構成素を置く、という文構造であると考えられる。それが「主語＋述語＋補語」なのである。

２）述語動詞と最も結束性が強い構成素は「補語」で原則として動詞の直後に置く。結束性が強いため、いかなる構成素も介在することはできない。動詞との結束性が強い分、それだけを取り出して主題化や焦点化はしにくい。一方、事象を成立させるための「主語」は述語動詞に対して独立的な構成素であるので補語と異なり、主題化や焦点化しやすい。

３）「主題」は文頭に置く。主題には２種類ある。①「～について」と話し手の伝達内容を聞き手に理解しやすくするための「話題明示」と②場面設定として「場所」「時」などの叙述内容の「範囲設定」を示す主題である。前者の場合、しばしば対比的な場面に使われる。動詞との結束性が強い不定の補語のみを文頭に置いて主題化することはできない。定の補語やもともと文頭にある主語は主題化することはできるが、主題マーカーを置くことが望ましい。主語の主題化はそのあとに同じものを指す主語相当の代名詞を繰り返すという形を使うこともある。

４）「焦点」は文末に置く。焦点は構成素が一つとは限らない。動詞との結束性が

強い不定の補語のみを焦点化することはできず、その場合は動詞句全体に焦点があると捉えられる。定の補語のみも焦点化しにくく、焦点マーカーを置く方がよい。主語のみ動詞の前に位置したまま、焦点マーカーを置いて焦点化する。

５）対比的な内容を示す２文連続では、先行文と後続文が同じ形でもよいが、最も望ましい形は、先行文で文末に置かれた焦点を後続文が主題として受け継ぐ[21]、という形である。このことは文連続産出の原則ともいうべきものである。

統語構造は文構成素の構造、情報構造は文の意味構造のようなもので、両者は別にして考えるべきものだと言われている。けれども語形変化をしない孤立語タイプのラオ語文の記述には、統語構造や情報構造と言った個別の視点から別だての記述をするのではなく、いかにわかりやすく叙述内容を伝達するか、という視点にたって語順を記述することが必要なのではないかと考える。

本稿では、主題マーカーや焦点マーカーにはどのようなものがあるか、ということや情報構造上重要な省略、さらには音声学的な特徴、例えば、ピッチの変化などについては検討しなかった。これらの点についてはさらに多様な資料から別稿で詳細に検討したい。

---

[1] 本研究は JSPS 科研費 JP17H02331 の助成を受けた研究の成果の一部である。

[2] ラオ語文の判断は S・A 氏（男性・1988 年生）と S・H 氏（女性・1995 年生）の判断に従った。ご協力に心よりお礼を申し上げる。

[3] The Leipzig glossing Roles (2015) /https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/Glossing-Rules.pdf /

[4] 実は主語は述語に対する意味関係からみれば、動作の主体、属性の持ち主、情意の主体など、きわめて多様であり、詳細な検討が必要である。

[5] 動詞のない名詞述語文もある。例）khòy pěn khón láaw （私/コピュラ/人/ラオス⇒「私はラオス人です」

[6] 代わりに動詞句連続の形を使う。

[7] 「動詞連続」であるので、次節 4.「動詞連続」の中で述べるべきかもしれないが、類似のタイ語と異なる特筆すべき点なので、別途、節を設ける。

[8] ʔǎwhày の hày の前に否定辞を入れることができず、ʔǎw と必ず一緒に使うこと、さらには hày の後ろに与えられるヒト、あるいは与える先を述べても述べなくてもよいので、きわめて前置詞的な補助方向動詞と言えるかもしれない。

[9] 動詞「与える」はラオ語は hày、タイ語は hây。声調のみが異なる。

[10] 間に接続詞を入れて、2 つの文にすることが多い。

[11] この点もタイ語と異なる。

[12] 動詞を繰り返す方が丁寧であるということから、文体上の理由も起因していると思われる。本稿では紙面の都合上、省略については検討しない

[13] 存在文「míi～」（～がある）は「～」部分に「存在するモノ」を置く。この「存在するモノ」は動詞 míi（ある）の意味を補う不可欠要素であり、動詞の直後に置くことから補語であると言える。例） míi pûm yuu thə́ŋ tóʔ（exist/book/on-LOC/table）「本が机の上にある」

[14] 台本 Dokked(2013)「huacay paatthanaa」にある文の位置を示す。p.はページ、l.は行を表す。

[15] 主題マーカーは他にもあり、「lèʔ」「nân」「nîi」などがある。検討は別稿にゆずる。

[16] 話すときはポーズを置き、書く時は「, 」を書く。

[17] 後述するが、mɛɛn は焦点マーカーとして機能していると考えられる。主題化したい構成素を文頭に置くというよりは、むしろ焦点化したい構成素を後ろに置いた形であると考えられる。

[18] 下線部は焦点部分を示す。

[19] mûɯdǎy（いつ）は、文頭に置くと聞き手がわかっていないのはおかしい、という反語的、あるいは非難的なバイアスのかかった疑問表現になりうる。場面によっては答えを必要とせず、話し手のムードを表す表現となっている。例えば、mûɯdǎy láaw siʔ máa（when/3/IRR/come）「いつになったら彼女は来るのか」

[20] 厳密には原因や理由を問う pěŋǎŋ（なぜ）は、文末に置くと「なんで～なの!?」という上記「いつ」と同じような反語的、あるいは非難的なバイアスのかかった疑問表現になりうる。

[21] 「何ですか？」は必ず焦点マーカーの mɛɛn を伴って mɛɛn ɲǎŋ と質問する。そしてその答えは「何」に代わる「モノ」のみを応え、mɛɛn は繰り返さない。このことからも後続文は質問の焦点を受け継ぐと同時に焦点化せずに応える形が自然であるということがわかる。

参考文献

上田玲子．1986.『タイ語疑問文における「質問の焦点」について－/rúplàaw/型質問文を中心にして－』．東京外国語大学外国語学部卒業論文

尾上圭介編．2004.『朝倉日本語講座 6 巻　文法II』．朝倉書店

鈴木玲子．2006. 「ラオ語の名詞句」『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』119- 153. 東南アジア諸言語研究会編，慶應義塾大学言語文化研究所

_____．2017.「ラオ語の動詞連続」『東南アジア諸言語の動詞連続』98-129. 慶應義塾大学言語文化研究所

_____．2016.「情報構造と名詞述語文」『語学研究所論集』第 21 号, 159 -164. 東京外国語大学語学研究所．（言語データ）

（ http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/93703/1/jilr_21_sp_data_lao_Suzuki.pdf ）

_____. 2019.「ラオ語の情報表示の諸要素」『語学研究所論集』第 24 号，393-400.東京外国語大学語学研究所．（言語データ）（http://www.tufs.ac.jp/ common/ fs/ilr/contents/ronshuu/24/jilr24_sp_Lao22_Suzuki.pdf）

益岡隆志 他編．1995.『日本語の主題と取り立て』くろしお出版

峰岸真琴．2019.「タイ語の情報構造に関わる諸表現」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 50 号, 189-204. 慶應義塾大学言語文化研究所

_____. 2019.「情報構造調査票 Ver.1」科研 JP17H02331（未公開配布資料）

Li,C,N & S.A.Thompson . 1976. “Subject and Topic.” Academoc Press.

Iwasaki, Shoichi.2006. “What is /nia/doing /nia/ ? : Gramaaticalization of topic in Thai.” 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 AA 件フォーラム 2006.11.9.（配布資料）

Iwasaki, Shoichi. and Preeya Ingkaphirom. 2005. “A Reference Grammar of Thai. ” Cambridge

Enfield,N.J. 2007. “A grammar of Lao.” Mouton de Gruyter

_____. 2012. “Verbs and Multi-verb Constructions in Lao.” *The Tai- Kadai Languages*: 83-183. Routledge